Endangered Animals

絶滅危惧動物百科 9

[(財)自然環境研究センター 監訳]

バンデューラバルブス―ポリネシアマイマイ類

ハ-ホ



朝倉書店

需要全本请访问 www.ertongbook.com

絶滅危惧動物百科 9　　定価はカバーに表示

2008年9月15日　初版第1刷

監　訳　(財)自然環境研究センター
発行者　朝　倉　邦　造
発行所　株式会社　朝　倉　書　店
東京都新宿区新小川町6－29
郵便番号　162－8707
電　話　03(3260)0141
FAX　03(3260)0180
http://www.asakura.co.jp

〈検印省略〉

©2008〈無断複写・転載を禁ず〉

中央印刷・渡辺製本

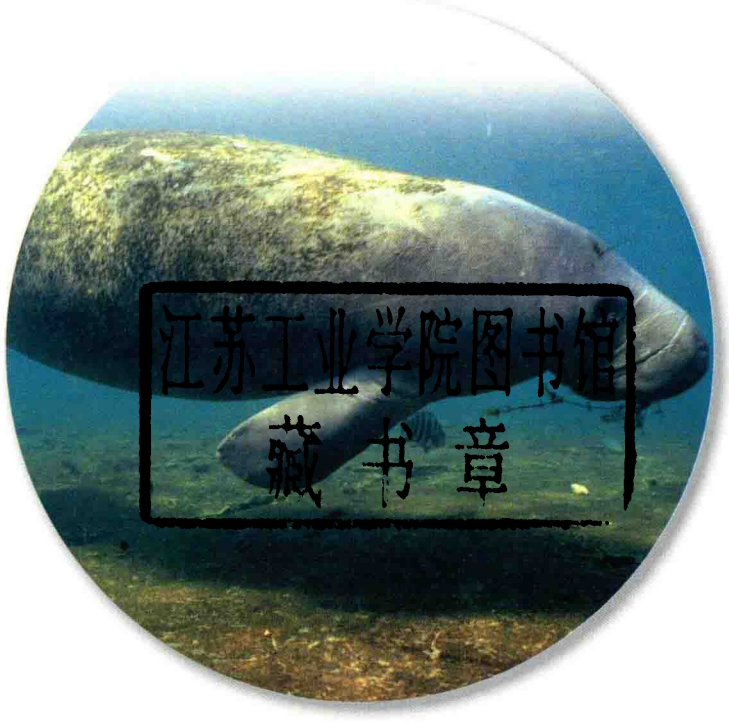
ISBN 978-4-254-17689-6　C 3345　　Printed in Japan

Endangered Animals

絶滅危惧動物百科 9

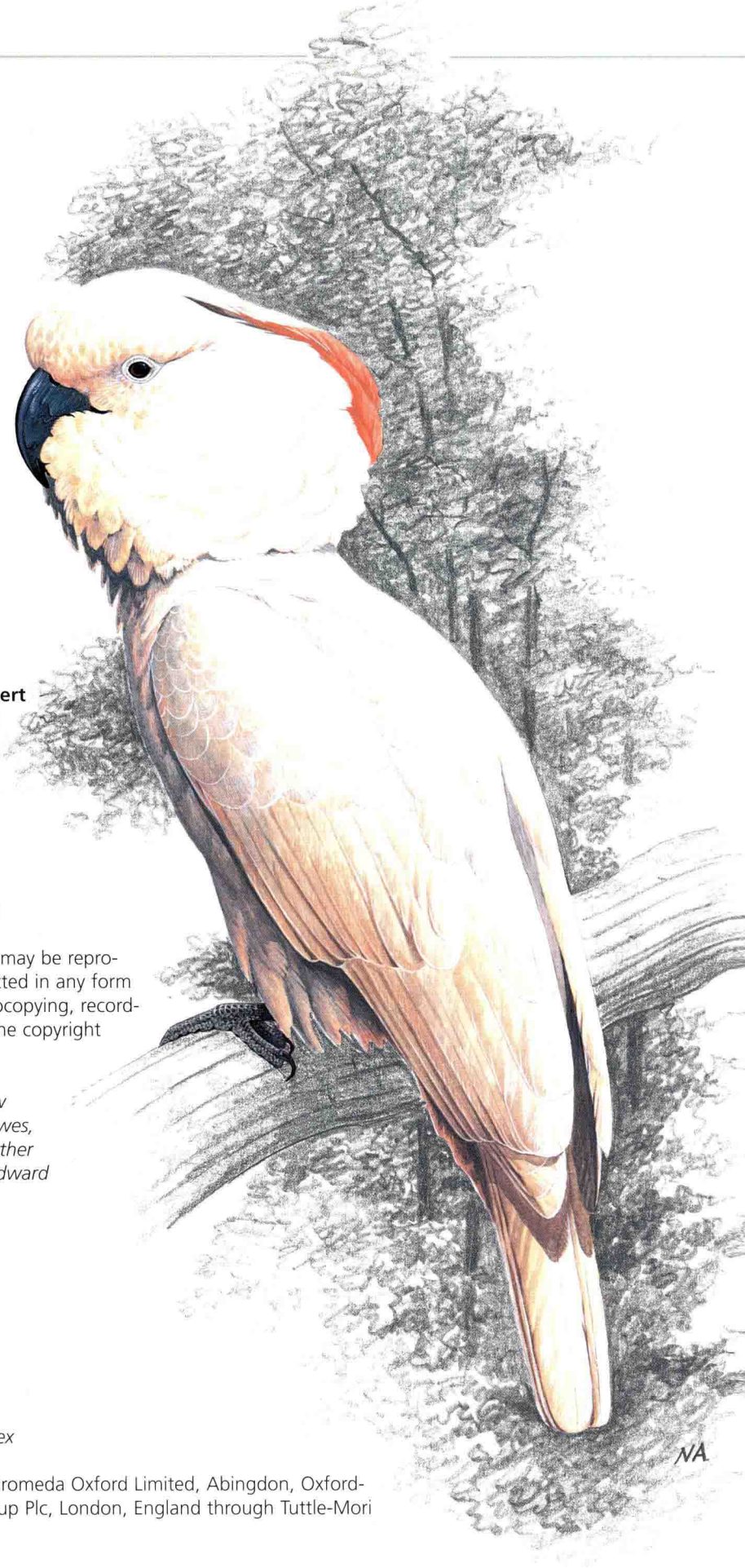
[(財)自然環境研究センター 監訳]

バンデューラバルブス―ポリネシアマイマイ類



江苏工业学院图书馆
藏书章

朝倉書店



ENDANGERED ANIMALS
by Amy-Jane Beer, Andrew Campbell, Robert and Valerie Davies, John Dawes, Jonathan Elphick, Tim Halliday, Pat Morris

Produced by Andromeda Oxford Limited
11–13 The Vineyard, Abingdon,
Oxon OX14 3PX, U.K.
www.andromeda.co.uk

Copyright © Andromeda Oxford Limited 2002

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced, stored in a retrieval system, or transmitted in any form or by any means electronic, mechanical, photocopying, recording, or otherwise, without the permission of the copyright holder.

Principal Contributors: *Amy-Jane Beer, Andrew Campbell, Robert and Valerie Davies, John Dawes, Jonathan Elphick, Tim Halliday, Pat Morris. Further contributions by David Capper and John Woodward*

Project Director: *Graham Bateman*
Managing Editors: *Shaun Barrington, Jo Newson*
Editor: *Penelope Mathias*
Art Editor and Designer: *Steve McCurdy*
Cartographic Editor: *Tim Williams*
Editorial Assistant: *Marian Dreier*
Picture Manager: *Claire Turner*
Production: *Clive Sparling*
Indexers: *Indexing Specialists, Hove, East Sussex*

Japanese translation rights arranged with Andromeda Oxford Limited, Abingdon, Oxfordshire, England, and The Brown Reference Group Plc, London, England through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

訳 者 序

地球上に現在みられる野生生物の種数は，学名がついているものだけでも約150万種，未記載のものを含めると1000万種を超えるといわれますが，ある推定によれば，このままでは21世紀中にその約半数が地球上から姿を消すと考えられています（たとえばエドワード・O・ウィルソン『生命の未来』，角川書店，2003参照）．このように大規模な絶滅現象は，およそ6500万年前に恐竜をはじめとする多くの生物種が絶滅して以来のもので，その主な原因は人口の増加や人間による資源利用量の増大，それにともなって起きているさまざまな形の環境変化です．ただし，生息状況についてある程度の情報があり，絶滅のおそれの高さが評価されている生物種は，体が比較的大きくて目立つものなど，全体のごく一部にすぎません．それでも，国際自然保護連合（IUCN）による2006年版のレッドリスト（絶滅危惧種のリスト）には，約1万6000種もの動植物が掲載されています．

本書『絶滅危惧動物百科』は，2002年にイギリスで出版された“Endangered Animals”という百科図鑑を翻訳したものです．本書は，過去に絶滅したか，現在，絶滅のおそれがある，あるいは何か保全上の問題を抱えている野生動物のうちの代表的・典型的な種を，哺乳類と鳥類を中心に，さらに他の脊椎動物，無脊椎動物も広く取り上げて，形態や分布，個体数，生態などの基本情報とともに，現在，その種がどのような状況におかれているか，絶滅のおそれを高めている原因は何か，絶滅を回避するためにどのような対策がとられているかなどについて，写真やイラストを添えて解説しています．

このようなテーマの本に避けがたい問題として，現在の状況を詳しく正確に記述しようとすればするほど，内容がすぐに古くなるということがあります．たとえば，本書の第1巻に解説がある絶滅危惧度合いの評価基準は，IUCNによって1994年に採用されたもので，その後，2001年に一部が改定された最新版ではありません．IUCNによる絶滅危惧度合いの評価結果やワシントン条約（「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」，CITES）付属書への掲載状況が，本書の出版後に変わっている種もあります．

また，日本に生息していて私たちがよく知っている動物（たとえばクビワオオコウモリ，ニホンザル，ニホンヤマネなど）についての解説をみると，事実とは異なっていたり，やや古いデータに基づくと思われる記述も散見されます．同様に，他の種についても若干の誤りが含まれている可能性があります．本書の原著者らが，入手できる資料を駆使して，正確な情報を提供すべく最大限の努力を払っているであろうことはいうまでもありませんが，本書のようにさまざまな対象を扱う場合には，どうしてもこうしたことが起こりがちです．

さらに，野生生物をどのように保全すべきかについての意見には，書き手の個人的な価値観が色濃く反映されることにも注意しなければなりません．原著者たちは，さまざまな意見の間でできるだけバランスをとろうとしていると思われますが，たとえば野生動物利用のあり方やアフリカゾウ，ミンククジラ，タイマイに関する解説にみられるように，原著者たちがイギリス人であることから，欧米中心の考え方に沿った記述がされているところもあります．ワシントン条約や国際捕鯨取締条約に基づく決定など，当面の国際的な合意にしても，政治的・経済的な力も作用した結果であって，すべてが科学的にみて妥当である保証はないことも忘れてはいけません．

この翻訳では，本書が出版された後の変化や不適当と思われる箇所などについても，とくに修正することはせずに，いくつかの明らかな誤りを除いて，基本的には原文どおりにしてあります．訳者みずからが最新情報を探し出し，典拠にあたり，さらに原著者と協議するのはきわめて困難ですし，中途半端な改訂は加えずに原文のままとした方が，後述するように，むしろ本書の利用価値を高めると考えたからです．

本書は，以上のような留意点はありますが，日本にはあまり類書がないだけに，絶滅のおそれのある動物たちの現状について，世界中を見渡した幅広い知識を得たり，

需要全本请访问 www.ertongbook.com

どのように絶滅危惧種の保全を進めるべきかを考える上で，よい参考書であるのは間違いありません．なかでも第1巻の総説には，野生動物の保全に関わる基礎的な知識がうまくまとめられています．ただし，どのようなテーマでも，きちんと調べようとすれば，1つの本ですべてが事足りるようなことはなく，本書についてもそれがいえるのはすでに述べたとおりです．

それから，日本が主要な生息地ではない種の解説にも，日本がしばしば登場することに気づいてほしいと思います．それは，たとえばウバザメ，クロマグロ，タイマイ，スッポンモドキなどです．事実とは違うと思われる記述もいくらかはありますが，このことは日本が，他の先進諸国と同様に，世界中の野生動物をペット，食品，装飾品，日用品などとして大量に消費することを通じて，それらの生息状況にいかに大きな影響を及ぼしているかということ，また逆に自分たちの行動が事態を改善する大きな力にもなりうることを示しています．

読者は，本書を手がかりに，疑問に思う点についてはとくに，他の本を参照したり，最新データにあたるなどして，正確な，また詳しい情報を得る努力をしてください．本書にある記述をそのまま受け入れるのでなく，異なる情報や意見に接し，それらの違いが生じた理由について考えることは，問題をより深く理解するのに役立つでしょう．そして，絶滅危惧種を含む野生生物の保全のあり方についてみずから考え，実行に移してほしいと思います．本書がそのような作業の出発点として大いに利用されることを期待します．

2008年3月

訳者を代表して
石　井　信　夫

訳者一覧

監　訳

（財）自然環境研究センター

分類群別担当者

石井信夫	東京女子大学文理学部	［第1巻（総説）・陸生哺乳類］
石塚　新	（財）自然環境研究センター	［無脊椎動物・昆虫類］
今井　仁	（財）自然環境研究センター	［魚類］
斉藤明子	千葉県立中央博物館	［昆虫類］
富田京一	肉食爬虫類研究所	［爬虫類・両生類］
中山聖子	（財）自然環境研究センター	［甲殻類］
奴賀俊光	千葉大学海洋バイオシステム研究センター	［鳥類］
箕輪義隆	（財）日本鳥類保護連盟調査室	［鳥類］
吉岡　基	三重大学大学院生物資源学研究科	［海生哺乳類］

訳　者

荒木良太	奥原　剛	中村康弘	広瀬珠子
石田スーザン	熊懐　愛	名取洋司	箕輪友紀子
打木研三	中島絵里	橋本幸彦	米田久美子

（五十音順）

目　　次

バンデューラバルブス 6
バンテン 8
ヒクイドリ 10
ビクーニャ 12
ヒゲドリ 14
【ヒョウ】ウンピョウ 16
【ヒョウ】ヒョウ 18
【ヒョウ】ユキヒョウ 20
ヒョウモンナメラ 22
ピラルク 24
ピンクシーファン 26
フィリピンヒゲイノシシ 28
フィリピンヒヨケザル 30
フエコチドリ 32
フォッサ 34
フクロアリクイ 36
【フクロウ】シマフクロウ 38
【フクロウ】ニシアメリカフクロウ 40
【フクロウ】マダガスカルメンフクロウ 42
フクロオオカミ（タスマニアオオカミ） 44
フクロモグラ 46
フクロモモンガダマシ 48
フタコブラクダ 50
フトクビスジホソオドラゴン 52
ブラインドケーブカラシン 54
ブラックバック 56
ブーラミス 58
フレッシュウォーターアンチョビー 60
プロサーパインイワワラビー 62
フロリダピューマ 64
フロリダマナティー 66
ベニジュケイ 68
【ヘビ】サンフランシスコガーターヘビ 70
【ヘビ】トウブインディゴヘビ 72
【ヘビ】ミロスクサリヘビ 74
ベルベットワーム 76
ヘルメットモズ 78
【ボア】ジャマイカボア 80
【ボア】マダガスカルボア 82
ホオアカトキ 84
ホオジロシマアカゲラ 86
ホオダレムクドリ 88
ホクオウクシイモリ 90
ポタモガーレ 92
ホライモリ 94
ポリネシアマイマイ類 96
用語解説 98
参考文献/ウェブサイト 101
謝辞と写真提供 102
分類群ごとの動物名リスト 103
学名・和名索引 105

この図鑑セットについて

『絶滅危惧動物百科』は，世界中の動物に及んでいる脅威を取り上げて解説する全10巻の図鑑セットです．主な脅威の1つは生息地の消失ですが，それだけではなく，本来生息しない地域へ移入された種の影響がとくに深刻です．

さまざまな問題に直面する動物たちの実例を，哺乳類や鳥類のほか，魚類，爬虫類，両生類，昆虫・無脊椎動物まで，主な動物分類群がすべて含まれるように選びました．生息数がきわめて多いにもかかわらず，問題に直面している動物がいます．また，すでに絶滅した動物もいます．

第1巻『総説―絶滅危惧動物とは』は，科学者が動物を分類する方法や，動物たちが絶滅の危機に瀕している理由，保全活動家の仕事などについて解説しています．文中の相互索引には，巻数の次にページ数が記され，この図鑑セットの中の関連箇所を示しています．

第2巻から第10巻は，それぞれの種についての解説です．登場する動物たちは，和名でアイウエオ順に，それぞれ見開き2ページで紹介されています．データパネルには基本情報と生息分布図がまとめられています．

各巻の目次にアイウエオ順で並んだ動物の和名から，特定の種を探してください（各巻末尾の全巻共通索引には，学名と和名のページがあります）．知りたい動物がみつかったら，まずデータパネルから関連する種をたどることもできます．「＊」マークがついた「近縁の絶滅危惧種」は別に解説されています．また，左ページ下にある関連ページの相互索引は，第1巻，あるいは他の巻の項目を指しています．たとえば，「コキンチョウ **5**：66」は，第5巻の66ページから見開きでコキンチョウの解説があることを示しています．この相互索引には，ふつう，いま読んでいる種と同じ属や科に含まれる動物が出ていますが，分布域や脅威の種類が同じ動物が記されている場合もあります．

各巻の末尾には，用語解説，参考になる文献やウェブサイト，全巻索引があります．



バンデューラバルブス

Barbus*（*Puntius*）*bandula

Bandula barb

バンデューラバルブスはスリランカにある多数のプランテーションを縫って流れている名もない小川に生息しています．現在，本種の小さな野生集団が絶滅の危機に瀕しています．

スリランカは，淡水魚や海産魚の種類がたいへん豊富な国です．長年にわたって，それら多数の魚種は世界中の科学者や愛好家の間で高い人気を保ってきています．ブラックルビーバルブスに代表される，有名なスリランカのバルブス類の中の数種は徹底的に人工繁殖がなされ，さまざまな体色やひれの形をもつ変異体もたくさんつくり出されています．

スリランカにおけるすべてのバルブスは愛好家の興味をひき，何年も商業的に人口繁殖されてきました．チェリーバルブスやカミングズバルブスのような，天然界において脅威にさらされている種もこれらに含まれています．しかしながら，バンデューラバルブスが今日受けているほどの強烈なプレッシャーにさらされているものはありません．

データパネル

英名 Bandula barb

学名 *Barbus* (*Puntius*) *bandula*

科名 コイ科 Cyprinidae

世界の個体数 人工繁殖によるものは数千個体，天然のものは不明

分布 スリランカ．ガラピタマダのちょうど北にあるパレガマエステート（ゴムの大農園）のミニマルコロニアの中を流れる名もない小川

生息場所 岸は泥で，植物が茂り，大小の丸い岩石が散在する流れの速い小川

大きさ 体長：4.1 cm．人工繁殖個体はそれより大きい

形態 体は小さい．体色は優美で明るい金色をしており，黒色横帯がある

食物 小型の無脊椎動物，有機残渣，植物性のもの．水槽内では配合飼料

繁殖 卵はよく葉が茂っている植物の中に散布される．約1日で孵化する

近縁の絶滅危惧種 アソカバルブス（*Barbus* (*Puntius*) *asoka*）：絶滅危惧（EN），カミングズバルブス（*B.* (*P.*) *cumingii*）：低リスク・保全対策依存（LRcd），ブラックルビーバルブス（*B.* (*P.*) *nigrofasciatus*）：低リスク・保全対策依存（LRcd），サイドストライプトバルブス（*B.* (*P.*) *pleurotaenia*）：低リスク・保全対策依存（LRcd），チェリーバルブス（*B.* (*P.*) *titteya*）：低リスク・保全対策依存（LRcd），マーテンスティンズバルブス（*B.* (*P.*) *martenstyni*）：絶滅危惧（EN）

現状 IUCN絶滅寸前（CR），CITES付属書非掲載

みつけにくい魚

記述はありませんが，おそらく1980年以来，バンデューラバルブスの有意な個体数が収集されたことはありません．本種は，ゴムの木に取り囲まれうっそうとした地域の小川に繁茂する植物の茎の隙間，あるいは岸際の葉の下に認められます．きわめて単純なことに，他のバルブスは容易に捕獲できたのでさかんに人工繁殖がなされましたが，バンデューラバルブスはみつけにくかったので取り残されてしまったのです．

ランジット・バンデューラ（本種の学名はこの研究者の名にちなんでつけられました）が1980～1982年に当地を訪れた際には，1時間で100個体を採集することができたと報告しています．その後まもなく，捕獲される数はとても少なくなってしまいました．1989～1990年に別の科学者ローアン・ペキヤゴダは記載論文を書き上げるために5回も当地を公式に訪問し，標本の採集を行いました．彼は，激しい雨の間は1個体もとれず，そうでない場合も1，2時間のうちに最高14個体しか採集することができませんでした．

汚染された水域

バンデューラバルブスを劇的な衰退へと導いた大きな要因の1つは，繰り返し襲ったなんらかの形の汚染だったと考えられます．その原因はおそらく，上流にある水田とゴム農園からの汚染物質の流入だと考えられます．



参照項目：「汚染」**1:** 52，バードダニオ **8:** 74

新居の探索

本種の正式記載のための採集がなされた後，少したってから，その種が人工的に繁殖させることができるかどうかを調べるために，多数の個体がスリランカの観賞魚繁殖輸出業者の1人に手渡されました．その繁殖計画は大成功をおさめ，現在では自然界へ再放流するために使える数は数千個体あります．

しかしながら，バンデューラバルブスのすみかであった小川は現在，これまでにないほどとてつもなく大きな脅威にさらされています．したがって，新しい魚を再放流できるような安全な場所はほとんどありません．

新しい場所の調査は，ブリーダーと島の保護当局によって行われています．しかし，それは容易な仕事ではありません．なぜなら，いかなる水域を代用の新居に決めても，そこには先住種がいるものであり，それらによって安定して個体群のバランスを，この場合「外来種」とみなされるバンデューラバルブスを導入することによって乱してしまうからです．

不安定な将来

自然界におけるバンデューラバルブスの将来は，きわめて危険な，刃の上に立たされているような状態にあるといえます．唯一知られている野生個体群は，ただ一度の大きな汚染事故でもあれば，一夜にして葬り去られてしまいかねない状況にあります．しかし，天然あるいは人工繁殖による個体を放流できる適切で安全な場所は，スリランカにはすでにどこにもないかもしれません．わずかに希望が見出せるのは，天然個体群を確保する努力が継続されていることと，ブリーダーの比較的安全な施設の中で，本種のストックが徐々に増えてきていることです．



バンデューラバルブスは，スリランカの小さな水路に生息しています．本種は飼育下ではよく繁殖しますが，天然では汚染の影響を受けやすいのです．

バンテン

Bos javanicus
Banteng

野生のバンテンは，密林の奥からめったに出てこない，臆病で，ほとんど知られていない動物です．しかし，家畜品種との交雑が続き，存続がおびやかされていることが，現在明らかになっています．



家畜化されたバンテン（バリウシと呼ばれることも多くあります）は，野生バンテンの生息域の多くで飼育されています．その結果，野生と家畜の血統間で交雑が起こり，野生型の遺伝子の希釈が生じています．何世代にもわたる家畜化を経て，バリウシは原種がもつ野生下での生活に対する適応力を失いました．バンテンとバリウシの交雑個体は，完全に健康で繁殖力がある一方で，東南アジアの密林での生存能力には乏しいのです．野生のバンテンにとって家畜と交雑することは，ウシの病気に感染する危険をともないます．病気は，限られた自然免疫しかもたない野生の群れに素早く広がります．

野生のバンテンは生まれながらに警戒心が強く，多くの時間を密生するやぶの中に隠れて過ごします．植物が勢いよく成長している伐開地で，採食するため林縁に出てくることがありますが，わずかでも危険の兆候があれば逃げる用意をつねにしています．バンテンは人とのあらゆる種類の接触を避けようとします．そのため，バンテンの研究は難しいのです．バンテンについての生物学的知見の多くは，捕獲個体の観察から得られたものです．

データパネル

英名 Banteng

学名 *Bos javanicus*

科名 ウシ科 Bovidae

世界の個体数 おそらく5000頭以下

分布 バリ島，カリマンタン（ボルネオ）島，カンボジア，ジャワ島，ラオス，マレーシア，タイ，ベトナムを含む，東南アジアとインドシナ半島

生息場所 密生した森林と竹林

大きさ 頭胴長：1.9～2.3m，肩高：1.6m，体重：600～800kg

形態 ウシのような動物で，栗色の短い体毛をもつ．オスはメスより暗い色（ときに藍色）．脚はやや短く肢の下半分は白い．オスは上方に湾曲する角をもつ．メスはオスよりまっすぐで短い角をもつ

食物 草本と木本の葉，樹木や灌木の枝

繁殖 野生のものは，2～3月に1頭を出産する．6～9カ月で離乳し，2～3年で成熟する．寿命は20年

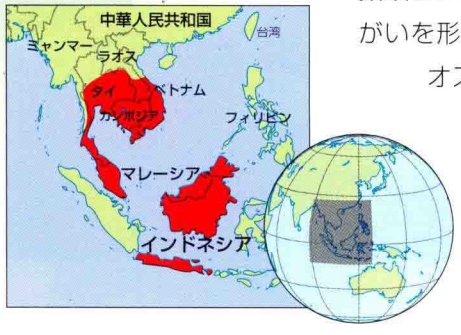
近縁の絶滅危惧種 コープレイ（クープレイ）（*Bos sauveli*）*：絶滅寸前（CR），ヤク（*B. grunniens*）*：危急（VU）

現状 IUCN絶滅危惧（EN），CITES付属書非掲載

縮小する生息地

人の集落に近い場所では，バンテンは夜行性の傾向があります．また，過度にかく乱されると生息地を放棄してしまいます．その結果，バンテンの分布域は，好適な生息地が残る地域でも縮小しつつあります．

野生のバンテンの群れはふつう1頭のオス成体および数頭のメスとその子で構成されます．つがいを形成していないオスは，年老いたオスや傷ついたオスから群れをのっとる機会をうかがいながら，“独身”群を形成して徘徊（はいかい）します．



バンテンの個体数が減少

参照項目：「同系交配と異種交雑」**1:** 58，コープレイ（クープレイ）**5:** 74，ヤク **10:** 42



バンテンは，背中にわずかにすじ模様のある臆病な野生ウシの1種です．東南アジアの低地や森林に覆われた丘稜地を小さな群れで徘徊(はいかい)します．

するにつれて，群れの平均サイズは小さくなっています．さらに，危険を警戒する個体が減ることで，残っているバンテンにとっては捕食の危険が増えます．とくに若い個体はドール（野生のイヌ）による攻撃を受けやすいのです．

衰退する種

バンテンの繁殖速度は遅く，メスは多くても1年に1子しか産みません．一部は肉のために，もっと利益を目的とする場合は角のために狩猟されます．角は彫刻され装飾品にされたり，もっと簡単にトロフィーにされたりします．現在のところ，バンテンは正式に保護されていないため，合法的な取引が続いています．モニタリング（監視調査）が行われていないため，バンテンが本当に厳しい状態にあることを示す情報はほとんどありません．しかし，いまある情報は深刻な減少を示しています．かつて東南アジアに広くみられたバンテンは，すでにインド，バングラデシュ，そしておそらくマレーシア西部で野生絶滅しています．タイでは20年前の20%まで個体数が落ち込んでいます．同様な減少はカンボジア，ラオス，ベトナムでも進行中のようです．オーストラリア北部の一部地域では群れが野生で生息していますが，それは自然分布域外で，家畜化された個体に由来するものであるため，真の野生バンテンとはみなされていません．

需要全本请访问 www.ertongbook.com

ヒクイドリ

Casuarius casuarius

Southern cassowary（double-wattled，two-wattled，common / Australian cassowary）

飛べない巨鳥ヒクイドリは，鳥類最大の種の１つです．ヒクイドリの将来は，生息地の保護や捕食者のコントロール，病気の予防を含む協調的な保護活動を続けることで守られるでしょう．

ヒクイドリは，ニューギニアで最大の陸上動物です．この島には本種のような大きな飛べない鳥が３種いますが，ヒクイドリはその中で唯一，オーストラリアにも分布しています．オーストラリアに生息するヒクイドリの個体数は，30年間で20%以上減少しました．総個体数は2000羽と推定され，クイーンズランド州北東海岸部の，人里離れたヨーク半島，そしてさらに南のクックタウンからタウンズヴィルの間の熱帯雨林に，14の孤立した個体群が分布しています．ニューギニアではもっと広く分布し，低地のほぼ全域に生息しています．それでもやはり，個体数が大きく減少している可能性があります．

データパネル

英名 Southern cassowary（double-wattled，two-wattled，common/Australian cassowary）

学名 *Casuarius casuarius*

科名 ヒクイドリ科 Casuariidae

世界の個体数 １万羽以下

分布 ニューギニア島のインドネシア領パプア州（旧イリアンジャヤ州）とパプアニューギニアのほか，インドネシアのアルー諸島とセラム島，北東オーストラリアの一部に生息する

生息場所 熱帯多雨林，果樹農園，サバンナ，森に近いマングローブ林

大きさ 体高：1.7m，体重：オス29～34kg，メス58kg

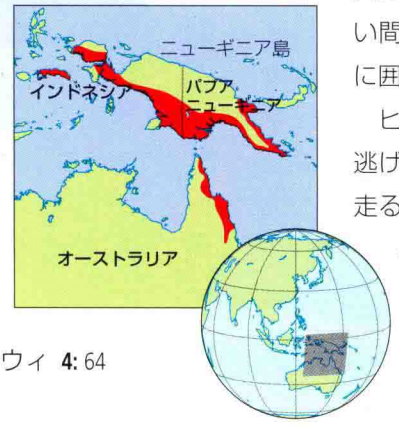
形態 大型の飛べない鳥で，つやのある黒い毛のような羽毛で体が覆われている．初列風切は丈夫でむき出しの羽軸に変化し，体，頭部，首の下へ湾曲している．頭部は明るい青色の皮膚が露出している．首の皮膚は暗青色で，変異に富んだ赤色部分がある．前頸からは，２本の赤い肉垂がぶら下がっている．頭頂にはかぶとのような角質の突起がある．メスの裸出部は鮮やかで，かぶとも大きい．裸出部の色は気分によって変化する．ヒナには黄色と黒の縞模様がある．若鳥は褐色で，かぶとと肉垂は小さい

食物 主に果実で，ほかにキノコやカタツムリ，昆虫，その他，無脊椎動物を採食する．時に小型の脊椎動物や死肉を食べることがある

繁殖 メスは交尾後，オスのなわばり内で数週間一緒に過ごし，オスのつくった浅い巣に３～５個の暗緑色の卵を産んだ後，別のオスとつがいになる．卵はオスが単独で抱卵し，孵化後は約９カ月にわたりヒナの世話をする

近縁の絶滅危惧種 コヒクイドリ（*Casuarius bennetti*）：低リスク・準絶滅危惧（LRnt），パプアヒクイドリ（*C. unappendiculatus*）：危急（VU）

現状 IUCN危急（VU），CITES付属書非掲載



特　徴

ヒクイドリの特徴は，羽毛が哺乳類のふさふさした毛のように変化していることと，頭頂に扁平な突起（かぶと）があることです．かぶとの機能についてはいくつかの説があります．もっとも有力な説は，裸出部や肉垂（首から下がるたるんだ皮膚）と同様，この鳥の社会行動においてきわめて重要な役割を果たしている，というものです．いちばんありそうもないのは，ジャングルの植生をなぎ倒して進むため，という説です．飼育下の個体では，かぶとをシャベルのように使うのが観察されています．野生状態では，餌を探して落ち葉をかき分けるのにも使われるのでしょう．

ニューギニアの森林にすむ部族にとって，ヒクイドリ類は，言い伝えや神秘的な儀式において大切な役割をもつ，文化的にたいへん重要な存在でした．肉を目当てに狩られるだけでなく，羽毛は儀式用の頭飾りに，初列風切の羽軸はイヤリングや鼻飾りに，脚の骨は削って短刀やスプーン，その他の道具に加工されます．村人はよく，この鳥のヒナをとらえて，大きく育てて食用にするか商人に売るために飼育しています．まだ小さい間はともかく，成鳥になりしだい，厳重に囲いに入れられます．

ヒクイドリは，危険を避けるため走って逃げます．その足は強力で，時速50kmで走ることができます．しかし，ヒナを守るときや窮地に追い込まれたとき，ある

参照項目：「調査研究」**1:** 86，キタタテジマキーウィ **4:** 64

いは飼われている場合でも危険なことがあります．両足のいちばん内側の足指には，10 cm もある鋭い短剣のような，かみそりのように鋭い爪が備わっていて，これをおそろしい武器として使います．

脅　威

ニューギニアでは，ワナでふつうに捕獲されているようなところでは個体数が維持できますが，狩猟はヒクイドリにとって重大な脅威となります．森林伐採は生息地を破壊し，猟師が奥地へ入りやすくします．オーストラリアでは，急速な熱帯雨林の破壊がつい最近まで主要な問題でした．残されたヒクイドリは生息地の分断化によって孤立してしまい，道路を横断する際に交通事故にあいやすくなります．また，病気，農作物を守るためや食用，スポーツとしての狩猟，イヌ（おそらくブタも）による捕食といった危険もあります．ブタは食べ物をめぐってヒクイドリと競争するほか，生息環境を悪化させることもあります．

保　護

保護関係者たちは，インドネシア領パプア州とパプアニューギニアにおけるヒクイドリの保護目標を設定しました．これには，個体数のモニタリング，狩猟や伐採が個体数に及ぼす影響の解析，狩猟制限の推進が含まれます．

同様の試みはオーストラリアでも行われ，現在ほとんどのヒクイドリ生息地が法律で保護されています．モニタリング技術の向上と個体数変動に関する調査は，いまなお必要です．優先事項としては，捕食者のコントロール，生息地破壊と病気の防止，交通事故を減らすことがあげられます．幸いなことに，オーストラリアでは熱帯雨林の破壊は減少していますし，一方ニューギニアでは狩猟や生息環境破壊の影響をまだ受けていないところが多く残されています．



ヒクイドリの鋭利な爪（左下のイラスト）はすぐれた武器です．攻撃する際は，相手の前に立ちはだかるか，走って追い抜きざま，両足でけって切りつけます．この爪は，深刻な，時には致命的な傷を負わせることができます．

ビクーニャ

Vicugna vicugna
Vicuña

何百年もの間，ビクーニャの非常に繊細な毛は珍重され，狩猟が規制されていなかったために数が減り続けてきました．しかし，ビクーニャの未来は明るいようです．

ビクーニャは1頭のオスが率いる5～10頭の家族からなる小さな群れで生活します．余ったオスたちは，最大で150頭にもなる，結びつきの弱い大きな群れをつくることがあります．ビクーニャはラクダの仲間で最小の種で，海抜4500m以上のアンデス高地の乾燥した草原に生息しています．昼間は採食し，夜になると決まった道を通って別の場所へ移動し，そこで夜を過ごします．

ビクーニャは他のラクダ科の動物と異なり，水を定期的に飲まなければならず，たいてい水場の近くにいます．なわばりは共同の糞塊（ふんかい）でマークされ，200ha以上ある場合もあります．ビクーニャはほっそりした体型をして，毛皮は薄茶色，首と頭は赤茶色で，その下は灰色がかった白色をしています．とても用心深く，つねに危険に注意を払い，危険が近づくと大きく高いピーという警戒音を上げます．

ビクーニャは，ほとんどの動物が息を切らせてしまうような高地を時速50kmで走ることができます．この大きさの動物としては大きく力強い心臓をもち，血液は酸素を大量に吸収することができます．このようなたいへん効率のよい循環器系のおかげで，高地でも速く走ることができます．

貴重品

ビクーニャは，海抜5800メートル程度の場所にすむ他の哺乳類と同様に，とくに夜間，非常な低温にさらされます．この低温から身を守るために，繊細で長い毛衣が発達しました．この毛衣は暖かい空気の層を皮膚との間につくり，体温の損失を減少させます．

ビクーニャの繊細な毛は人々に珍重され，防寒着をつくるために利用されてきました．何百年もの間，アンデス高地にすむ先住民たちは，ビクーニャの群れを狩り，毛皮をはぎ，毛をつむいで高貴な人々のための柔らかい服をつくりました．

ビクーニャの毛は季節ごとに生え変わるので，密生した植物の中へ追い込んで，枝などにひっかかってとれた毛を集めることも可能でした．こうした行為はビクーニャをおびえさせるだけで，個体数にはほとんど影響を与えなかったと考えられます．

もともとビクーニャは約150万頭いたと考えられていますが，スペイン人が16世紀にペルーを侵略したとき，この豪華な毛皮が目をつけられ，ヨーロッパですぐに人気が高まり

データパネル

英名 Vicuña

学名 *Vicugna vicugna*

科名 ラクダ科 Camelidae

世界の個体数 約12万5000頭（1980年代）

分布 海抜4500m以上のペルー南部，ボリビア西部，アルゼンチン北西部とチリ北部のアンデス山脈

生息場所 海抜4500m以上の乾燥した草地，水場の近く

大きさ 頭胴長：1.25～1.9m，肩高：70～100cm，尾長：15～25cm，体重：35～65kg

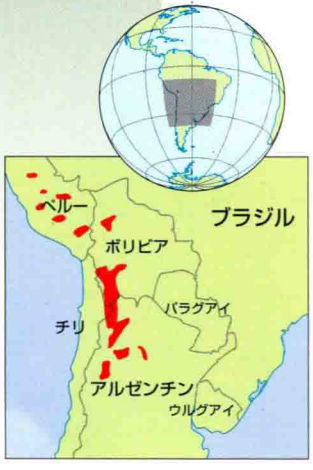
形態 ほっそりした体と足，毛衣は薄茶色で，腹側は汚白色（おはくしょく）．長く白いたてがみ状の毛が胸部にある

食物 ほとんどイネ科植物．毎日水を飲む必要がある

繁殖 7カ月の妊娠期間で，1年に1頭を出産する．寿命は野生下では15～20年

近縁の絶滅危惧種 フタコブラクダ（*Camelus bactrianus*）*：絶滅危惧（EN），グアナコ（*Lama guanicöe*）：危急（VU）

現状 IUCN低リスク・保全対策依存（LRcd），CITES付属書Ⅰ



参照項目：「特殊化」**1:** 30，「贅沢品」**1:** 48，フタコブラクダ **9:** 50

ました．スペイン人たちは，銃を持ち込んで多数のビクーニャを殺し，死体の毛皮をはぐことで，多くの毛を短時間に得ることができました．スペインの統治がおわった後の1825年，ビクーニャは保護動物となりましたが，毛の価値が高いままだったので法律の徹底は困難でした．その結果，多くのビクーニャが殺され続けました．ビクーニャの毛の需要は19～20世紀において非常に高く，ビクーニャを殺すことにより需要が満たされました．毎年，何万頭ものビクーニャが殺され，個体数はどんどん減少していき，1960年までには約6000頭が生息しているだけになりました．

保　護

1960年代以降，ビクーニャの個体数は着実に増加しましたが，以前の分布域の大部分からは消失し，残った群れは広く点在しています．現在，約半数のビクーニャはペルーのパンパス・ガレラ国立公園に生息しています．今日，ビクーニャは完全に保護されており，その毛の国際取引は厳しく規制されています．生きたビクーニャからとった毛だけが合法的に売買できます．このような規制がさらなる個体数の減少を食いとめ，ビクーニャを絶滅から守ることでしょう．



ビクーニャはリャマに似たラクダの仲間です．その繊細な毛皮は，アンデス山脈高地のとても低い温度への適応として進化してきたものです．

ヒゲドリ

Procnias tricarunculata
Three-wattled bellbird

中央アメリカにすむヒゲドリの英名（three-wattled bellbird）は，オスのくちばしの根元から下がる肉垂と鳴り響くような声からつけられました．この鳥についてはわずかしかわかっていませんが，生息地である森林の伐採が続いていることが，個体数をひどく減少させているようです．

カザリドリ科スズドリ属の4種のうち，ヒゲドリだけが中央アメリカに生息し，他の3種は南アメリカに分布しています．本種は生息地の破壊により危険な状況にあり，とくに非繁殖期を過ごす低地でそれが著しいようです．

ヒゲドリは果実をつけた常緑樹の樹冠部の葉の中に隠れて過ごすことが多く，そこで果実をつまみとるように採食します．果実食の他のカザリドリ類と同様，ヒゲドリのくちばしは，大きな果実を丸飲みすることに適応し，口の幅が広くなっています．地上に吐き出された種子の分析や直接観察から，クスノキ科植物の大きな果実が，脂肪分とタンパク質を豊富に含むので，この鳥にとってとくに重要な食べ物であることがわかりました．クスノキ科の樹木はとくに高地の森林に多く，この鳥の繁殖分布を決める要因になっているようです．



大きな声で叫ぶ鳥

オスのヒゲドリは子育てにまったく参加せず，毎年複数のメスとつがいになろうとします．オスは，メスをひきつけ，他のオスに自分の存在を知らせるため，自分の求愛なわばりの中で何時間も続けて驚くほど大きな声で鳴きます．この鳴き声はボーンという破裂音で構成されています．ときどきベルによく似た響きに聞こえますが，むしろハンマーで鉄床（かなとこ）を打つ音に似ています．オスの鳴管にはとくに多くの筋肉がついていて，大きな声を出すのに役立っているようです．オスのヒゲドリは鳴くときに体を前に傾け，下くちばしが胸につくくらい大きくく

データパネル

英名 Three-wattled bellbird

学名 *Procnias tricarunculata*

科名 カザリドリ科 Cotingidae

世界の個体数 1万羽以下

分布 ニカラグア北西部，コスタリカ中央部，パナマ，おそらくホンジュラスのアガルタ山地でも繁殖する．カリブ海側の丘陵地とホンジュラス，ニカラグア北部の低地，パナマの両岸の丘陵帯で越冬する

生息場所 主に標高1200～2100mの山地や山麓の森林で繁殖し，非繁殖期には丘陵地や低地へ移動する

大きさ 全長：オス30cm，メス27cm

形態 大きさはドバトくらいで，体は太め．オスの羽色はたいへん特徴的で，頭と首，上胸，上背は白く，それ以外は明るい赤褐色．目のまわりには黒い帯がある．3本の細長く黒い肉垂が黒いくちばしの根元からぶら下がっている．くちばしは幅広で，先から根元に向かって平たくなっている．メスの上面はオリーブ色で，羽の縁は黄色っぽい．下面は黄色っぽく，オリーブ色の縦斑がある．肉垂はない．オスの未成鳥は羽色がにぶく，肉垂は6カ月目から伸びはじめる

食物 樹木（とくにクスノキ科植物）の果実

繁殖 主に3～9月と考えられる．メスは木に枝で皿型の巣をつくり，暗色斑のある褐色の卵を1個産む．抱卵はメスが行う．子育てもメスが単独で行い，子は約4週間で巣立つ

近縁の絶滅危惧種 もっとも近縁なハゲノドスズドリ（*Procnias nudicollis*）：低リスク・準絶滅危惧（LRnt）．その他にキバシユキカザリドリ（*Carpodectes antoniae*）：絶滅危惧（EN），コスタリカルリカザリドリ（*Cotinga ridgwayi*）：危急（VU），アカノドカザリドリ（*Caphalopterus glabricollis*）：危急（VU）など，15種のカザリドリ類に絶滅のおそれがある

現状 IUCN危急（VU），CITES付属書非掲載

参照項目：「生息地の消失」**1:** 40，「国立公園」**1:** 93，キバラムクドリモドキ **4:** 74，ニシキフウキンチョウ **8:** 6



ヒゲドリはベルバード
と呼ばれる鳥たちの仲間
です．この仲間は，いずれ
の種も長く鳴り響くような鳴
き声で知られています．

ちばしをあけて，洞穴のように黒い口内をあらわにします．この変わった鳴き声には，より弱く鼻にかかったような，あるいは鋭い笛のような声がよく加わります．ヒゲドリはまるで腹話術師のようで，実際には1km近く離れていても，すぐ近くで鳴いているように聞こえることがあります．

クジャクのみごとな羽毛と同様に，オスのヒゲドリのドラマチックな鳴き声は，無口なメスがつがい相手を選ぶときに大きな役割を果たしています．研究者によると，違った地域にすむオスは，明らかに異なる声を発するといいます．この鳥が繁殖する山地の森林域は互いに大きく離れているので，おそらく“方言”が生じたのでしょう．

オスのくちばし基部からぶら下がっていて，鳴くときに伸びる奇妙な3本の肉垂は，鳴き声同様にメスをひきつけ，他のオスに存在を誇示する役割があるようです．オスはまた，雌雄にかかわらず近くにきた個体に触れるくらいまで近づき，耳元で大きな鳴き声を出すという奇妙な誇示を行います．これは，他のオスを枝から追い払い，メスに対してはつがい形成の刺激になります．

森林破壊

中央アメリカに生息する他の多くの森林生鳥類と同様，ヒゲドリも個体数が減少していると考えられます．森林が伐採され，ウシの放牧地やバナナ農園，その他の開発で転換されることによる生息地の消失は，この種が非繁殖期を過ごす低地でとくに激しくなっています．

繁殖個体群は，コスタリカからパナマにまたがる高地にある数カ所の保護区，たとえばコスタリカの有名なモンテヴェルデ生物保護区やラ・アミスター国際公園で保護されています．非繁殖期の生息地も一部が保護区に含まれています．しかしパナマでは現在，ほとんどの鳥はカリブ海側の丘陵地で越冬しています．これはおそらく，太平洋側の低地林が破壊された結果です．そのカリブ海側でも，保護区になっている場所でさえ森林開発の圧力が増しています．

需要全本请访问 www.ertongbook.com